九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 説話構文について ： 「今は昔」を中心に

春日，和男

https://doi.org/10.15017/2332745

出版情報：文學研究. 72, pp.1-20, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 説話構文について

## ――「今は昔」を中心に――

春日和男

目次

はじめに
一　「今は」と「昔」との接触（熟語性）
二　文頭と文末の呼応関係
三　文末に応ずる時制
四　時制と指示代名詞
五　既説事項との適応性
むすび

## はじめに

筆者が、日本の古代説話構文に興味を持つやうになったのは、ここ十年たらずのことである。説話構文を解明する鍵は、その冒頭の「今は昔」（今昔）といふ熟語の意味を正確に理解し、その機能するところと、その変化形について明確に把握しておくことにある。一方では、その構文要素となる助動詞ケリの意味、特にその時制についての原則を明瞭ならしめることであらう。実は、筆者の場合、この助動詞ケリの問題から説話構文に論が拡大したといふのが本姿であるが、以上のことについて、既に屢次にわたって、次のやうな論考を発表して来た。

Ⅰ　助動詞「けり」の二面性――竹岡説に思う――（国文学「言語と文芸」三九号　昭和三十九年五月）

Ⅱ　「今昔」考――説話の時制と文体――（国語国文三八三号　昭和四十一年七月）〔「今昔物語集」（日本文学研究資料叢書第一期掲載）〕

Ⅲ　「昔」と「今は昔」――「今昔考」補説――（語文研究二四号　昭和四十二年十月）〔以上二稿「存在詞に関する研究」所収〕

Ⅳ　"Tense and Style in Ancient Japanese Narratives" Bullentin of the Faculty of Literature No. 12. (Kyushu University Fukuoka Japan 1968)

Ⅴ　説話文体の効用――「今昔考」の終りに――（文学研究六十六輯　昭和四十四年九月）

Ⅵ　助動詞「けり」の論の終着駅――源氏物語桐壺巻説話論――（月刊文法　昭和四十五年二月号）

Ⅶ　助動詞「き」と「けり」の論への回想（月刊文法　昭和四十五年六月号）

以上の通りであったが、これでもなほ、論としては説得不十分な点を多少残してゐることも危惧されるので、ここに、みぎの中で重要と思はれる所を抜粋し、これに新たな事実を補足し、論理過程を多少改めて、本稿を草した。と

れによって、拙考の趣旨が多少とも的確に把握していただけることを期するものであるが、結論としては、既述の「説話文体の効用――「今昔考」の終りに――」（文学研究六十六輯）を位置づければ、多少の重複はあっても一往の論の体裁をなしたと信ずるものである。

なほ、本稿は、国語学会設立三十周年記念講演として、本年五月五日東京一つ橋講堂において発表した草稿に、加筆してなったものである。

## 一

古代説話の文頭にある「いまはむかし」といふ時制に関する副詞句は、従来、余りに無造作に、「昔」とか「むかしむかし」とかいふ、単なる過去を示す意に解されたり、更にその意味を敷衍するやうな「今では、もう昔のことだが」「今となっては、昔のことだが」といふ、現在との対立関係において受け取られたり、また「それは昔のことですが」といふやうな、現在を過去の時点に一致させる意味に受けとられたりしてゐる。(注) しかしそれは概ね正しくないのであって、やはり、「これは昔のことですが」と説く通時的現在の時制に見ること、敷衍すれば「昔から今まで」のごとき、時間的経過を踏まへた現在にとることが最も合理性を有すると強調したい。

まづ、「今では昔」といふ今に対立させて、昔といふ時制を導く形態について考へて見る。

年老いた今では、昔わたしが少年であった頃のことばかりが偲ばれる。

今は、昔国語学会の設立された当時のことが思ひ出される。

みぎの二文、前例は「今では、昔」、後例は「今は、昔」で意味は全く同じと断じてよい。しかし、それは、今に対立した昔、つまり現在と対立した過去を表出するものではなく、「今では・今は」は「偲ばれる・思ひ出される」をそれぞれ修飾することにおいて、文の時制を現在に導く結果になる。つまり「今は昔」といふ「今は」と「昔」とが接

触した形態は、文頭・文中にあって、それによって現在と対立した過去が強調されるのではなくて、過去と対立した現在が表出されるのが常である。「今では、昔のことである」といふ文表現も、構文上は、あくまで現在形でありながら、意味は、過去を導き出すやうに「今」に対応する「昔のことである」を置いてあるわけである。昔といへば、常に現在から考へて、過去のある時点をいふことに相違ないが、そのやうな表現は、みぎの「今は」と「昔」との文中における自然的（偶発的）接触形からは生じ難いのであって、換言すれば、単純な「昔」の意味は、わざわざ「今では昔」乃至「今は昔」のごとき表現をとらないでも表現できるといへるのである。要するに、以上のことをまとめると、

1　「今は昔」は、古代の説話文の冒頭にのみ多出するが、それは、「今は」と「昔」の自然的接続関係から生じたものとは考へられない。みぎのやうな現代における文例においても「今では、昔」、「今は、昔」が同じものとすれば、前例のごとく必ずしも文頭に生ずるとは限らない。

2　「今は」と「昔」の間に断層があって、それらが熟合することは必然的でない。つまり「今では、わたしが昔少年であった頃……」乃至「今は、国語学会が昔設立された当時……」といふやうな構文も可能であるからである。

3　文の時制は「今」であって、過去の「昔」にはならないこと前述の通りである。

となる。さて、これを古文の場合に適用して見ると

今は、なほ昔におぼしなずらへて物し給へ。（源氏桐壷）

「源氏物語」には、同様の例がなほ

今は、なほ昔におぼしなずらへて、うとからずもてなさせ給へ。（拍木）

などとあるが、これらが思ひ出される。そしてこれらは、右にのべた三つの条件を具備し、特に、「今は」と「昔」の断層の間に「なほ」といふ副詞が介在するのである。

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはてて、親の物へゐて参りなどせでやみにしももどかしく思ひ出でらるれば、今はひとへに……（更級日記、寛徳二年十一月廿日頃）

みぎは「今は」と「昔」の直接に続いた例であるが、「今は」は普通「思ひ知りはてて」にかけて解釈するのが常である。もちろんその場合「昔」との間には断層があって、二つの文節が熟語化するといふものではない。そして、これも前の「源氏物語」の例同様、先の三条件が適合するのである。次の

長月の豊のあかりは名のみして、今は昔に聞くの盃（新拾遺　五・五一八）

集めしも今は昔のわが窓をなほ過ぎがてに飛ぶ蛍かな（新葉　一六・一〇七七）

この二首は、「論考Ⅱ」以来しばしば引用した例であるが、前の「今は昔に」は「源氏物語」の例同様で、後の「今は昔の」は「更級日記」の例と同様の形を示す。前歌が「今は」と「昔に」の間に断層を設けて、「今は聞く（菊）」と続けることが可能であるのに対して、後歌の「今は昔の」は、その断層がやや曖昧であって、「今はもう昔になってゐる」と解することも可能で、一種の熟語化した例にもなるのである。但し、これとても「今は」を「なほ過ぎがてに飛ぶ」といふ連文節に掛けて解することが可能であって、いづれにせよ、歌語として多少掛詞的用法になった例と考へることができる。

いまはそのかみのことに侍るべし。ある人の歌はいかやうによむべきものぞと問はれしかば、愚なる心にまかせて、わづかにおもひえたることをかきつけ侍りし。いささかのよしもなくたゞことばにかきつゞけてをくり侍りし。……（定家自筆近代秀歌）

これは「昔」に代はるに遠中称の「そのかみ」といふ語を用ゐてあるが、「今は昔」とすると、説話文の冒頭形式と同様であるので、それを避けてこのやうな形にしたものとの忖度も生まれてくる。「近代秀歌」の冒頭であって、この表現こそ「今では昔のことである」を代表する典型であると思はれるが、かなり下った時代のものであることに

も問題があるであらう。但し、この文では、助動詞のキが使用されてゐる点、説話文のケリ体であるのと異なる。構文上からは現在形で、それと対立する過去を表示してゐることも先述の通りである。

以上の諸文例によって知られることは、既説の「今は昔」が接続する場合の三条件が全く適合することである。敷衍していへば、説話文の冒頭の「いまはむかし」は、みぎの文例に見たやうな、「今は」と「昔」の接近から生じた熟語ではない。文中における「今は」と「昔」の自然的接触は歴史的にいっても、「竹取物語」の冒頭にあらはれる「いまはむかし」とは、成立の次元を異にするものと思はれる。従って、「今では昔」乃至「今では昔のことである」と意味づけることに疑義を挿む余地は十分にある。

また、みぎの文例で見たやうに、「今は」と「昔」の間に断層を認めるとするなら、「今は」を末尾の「語り伝へたる」に掛けて、「昔」を説話本体を修飾する副詞と見る方がはるかに、自然な構文観でなくてはならない。しかしこの場合も「語り伝へ」といふ動作が通時的意味を有することに鑑みれば、「昔より」または「昔より今に至るまで」のごとき後示する文例に見られる副詞句の方が「今は」に比べてより適切である。また「いまはむかし」を熟語と見る立場とはおのづから異なるし、更には説話文頭に「今は」が必ずくるといふ理由もなくなってしまふ。

結局「いまはむかし」を熟語と見た場合、その意味が、「近代秀歌」冒頭のやうな一文相当のものと考へれば、古今を通じて、説話的な表現として更に多用されてもよささうなのに、余りに例が少ないのも気にかかることではなからうか。

**注** この十年間「今は昔」の解釈については、依然旧説が守られて来たが、論文としては次の二篇を参照されたい。

塚原鉄雄氏　文章の構造と主体の視点――伝承における過去と現在――（王朝第五冊）

山崎良幸氏「き」と「けり」の機能（四「今は昔」と助動詞「けり」）〔「万葉歌人の研究」所収〕

本稿は、これらの論文に答へる意味を持たせてある。

## 二

以上のやうな立場から「いまはむかし」は、なほ説話文頭における一つの熟語として、これ全体が末尾の「語り伝へたる」に呼応するもの、いひかへれば文頭・文末に修飾、被修飾の関係をもつものであると考へるのがより適当で、かつ自然ではなからうか。

1　わが国の昔物語の祖といはれる「竹取物語」において、すでにその形態が典型的に、且つ突然にあらはれること。

2　今昔物語集の千有余の物語群を調査しても、殆ど総べて文頭・文末が同じやうな形を示し、その例外は極めて少ない。

3　更に「語り伝へたる」のごとき文末型式のとれた形（ＡＢ型―論考Ⅴ―）の多い説話集にあっても、まま、文の頭尾を完全に備へた形（ＡＢＣ型）のものが散見することは、例へば「宇治拾遺物語」の例（二ノ三・二ノ四・十三ノ十二・十三ノ十三）などが示す通りである。

4　また、みぎのやうな呼応関係は、「梅沢本説話集」（古本説話集）上巻一「大斎院の事」や、後の「御伽草子」における「文正さうし」（以上いづれも後示）のやうに文末の「語り伝へたる」に相当する型式が文頭近くまで、次第に近接する傾向すらある。

5　しばしば末尾が脱落した形（ＡＢ型）の存することは、呼応関係がなかった為ではないかといふ疑念を挿むこともできようが、文末の脱落した形跡は、「落窪物語」や「宇治拾遺物語」の各説話の末尾が、格助詞ト止めになってゐること、あるいは「トカヤ・トナム・トゾ」等で止める形式のものが非常に多い（「宇治拾遺物語」の場合約三分一の六十五話がこの形で止められる）ことをもってしても、その呼応関係を存した痕跡は伺へるのであって、省略される場合があったから呼応関係がなかったと否定するわけにはゆかない。

以上のことは、文頭・文末に呼応関係を認めるべき一般論であるが、次の「今昔物語集」における二つの例は、なほそのことを実証し得てゐるものであらう。

今昔、天竺ノ人ハ道ヲ行ク時ハ必ズ比丘ヲ具ス。守アルガ故ナリ。昔一人ノ人アリ。……（四ノ十三）

これは「天竺人於海中値悪龍人依比丘教免害語」にある冒頭であって、その末尾は「……親シカラム人ヲハ可教キ也トナム語リ伝ヘタルトヤ」とあるものであるが、冒頭の「今昔」はその末尾の「語リ伝ヘタルトヤ」にかかるものと見ねば、二つの短文を介してその直後にあらはれる「昔」とは意味関係が不明となる。この「昔」は、素材としての説話内容そのものへの時制を示すものであり、それは「今昔、……トナム語リ伝ヘタルトヤ」といふ、いはば言語主体的表現の内側にあるものである。このやうな内側、つまり説話本体において用ゐられる「昔」は、その過去的意味がしばしば稀薄になって、形式化することが常である。それ故に、「昔一人ノ人アリ。」と現在形で示されてゐるのである。このやうな「昔」は説話文型の中にあって、去勢されたとでもいってよいものである。少なくともみぎの文型において、「今は昔」と、それに後続する「昔」とは機能する仕方が異なるものであって、従ってまた意味も同じでない。文頭の「今昔」は、文末の「語リ伝ヘタルトヤ」と呼応関係にあることを示す例となるのである。

次には同様のことを末尾の形態で証明しようと思ふ。

今昔、……然レバ母ノ尼君ヲ以テ可令祈キ也トハ此ヲ昔ヨリ云ヒ伝ヘタル也ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。（十四ノ三十五）

これは、「極楽寺僧誦仁王経施霊験語」の文末の部分であるが、「云ヒ伝ヘタル也ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ」の前の「云ヒ伝ヘタル也ケリ」は、まだ説話本体（素材）に属する部分であり、文頭の「今昔」と対応するのは、後の「語リ伝ヘタルトヤ」であることはいふまでもない。然るに説話本体の「云ヒ伝ヘタル也ケリ」には「昔ヨリ」といふ通時的な副詞が従属してゐるのに対し、文末の主体的な「語リ伝ヘタルトヤ」には、その直上に「昔ヨリ」のごとき副

詞があらはれることは、他の文例についても、絶無といってよい。つまり、本体における「昔ヨリ」に相当する主体的な副詞は、「今昔」（いまはむかし）に他ならぬことになるのである。従って、「今昔……語リ伝ヘタルトヤ」がこの場合も、説話の本体を包む外郭となるわけである。

なほ、この説話は、「宇治拾遺物語」では、「是も今は昔……母の尼して祈りはすべしと昔よりいひつたへたるもこの心なり。」とあり、「梅沢本説話集」（古本説話集）では「いまはむかし……さればはゝのあましていのりはすべしとむかしよりいひをきたること也」とあって、共に「今昔物語集」の文末の部分を欠くのであるが、それは既述の通り説話文型が簡略化してゐるからに他ならぬものと考へられる（論考Ⅱ）。と同時にまた、「今は昔」の意味が単なる「昔」と同じ意味に変化してゐるためとも思はれる。いはば、文頭から文末までが、実質的な説話本体（素材）化した構文上の変化を多少とも示すものに他ならないのである。それなるが為、それぞれ「昔より」といふ語を置けるのである。

以上によって、「今昔物語集」の文型では、文頭と文末との呼応関係が、かなり緊密であって、説話本体の中に出てゐる「昔」乃至「昔ヨリ」等はそれぞれ、文頭、文末に関連を有つものと見ないのがよろしいのではないかと思ふ。しかし「昔ヨリ云ヒ伝ヘタル也ケリ」は、外郭としての主体的な「今昔、語リ伝ヘタルトヤ」の表現に近似してゐるので、「今昔」つまり「いまはむかし」が「昔より」のごとき通時的要素を含んでゐる熟語であることを知ることができるのである。ともあれ一般に説話文といはれる文章構造の特色として次のごときことがいはれうると思ふ。

1　原則的な説話文は、一文構成のものであって、文章ではない。つまり文が集合しても、必ずしも文章とはなり得ない構造を持ってゐる。

2　時制をあらはす副詞は、主体的な外郭形成の「いまはむまし（今昔）」と説話本体つまり内容（素材）に直結するものとの両様があり、外郭にある主体的な時制は、説話内容の時制をしばしば制御する。例へば去勢された「昔」

のごとき観念は、その一顕現である。

以上の通りであるが、特に2については、後に更に補説を行なふことにする。

## 三

前承、文頭の「いまはむかし（今昔）」が文末の「語りつたへたる」と呼応し、これを修飾するとすれば、その意味をいかにとればよいかについて述べる。つまり、前出の「昔ヨリ云ヒ伝ヘタル也ケリ」の「昔ヨリ」を「いまはむかし」にあてがって敷衍すれば「昔より今まで」といふ意味にとるべきであらうと思ふ。これが時制における通時的現在であって、いはゆる歴史的現在（Historical present）に通ずるものである。

ただここに付加すべきは、末尾の「語りつたへたる」は、説話本体以外の付帯事項、例へば、前出の文例で「母ノ尼君ヲ以テ可令祈キ也トハ」（今昔十四ノ三十五）のごとき諺または誠言、あるいは「竹取物語」の末尾に見えるやうな

……つはものどもあまた具して、山へのぼりけるよりなむ、其山を富士の山とは名付けける。そのけぶりいまだ雲の中へ立のぼるとぞ云ひ伝へたる。

のごとき、現況を示すもの、あるいは、命名の由来等のことのみにかかり、説話本体とは別ではないかとの疑問をさし挿む向きもあらう。そのやうな場合、

今昔、天竺ニ提何長者ト云フ人有ケリ。……終ニ仏道ニ入レタリケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。（一・十五）

のごとく、末尾の形態が実質的説話の本体（素材）に直結した形をいかに処理すればよいかといふ問題が起きる。実際、「今昔物語集」の中では、右のやうな、付帯的事項を欠いた実質的本体を直接に受けて「トナム語リ伝ヘタルトヤ」に続く形が一番多く、二百八十一語、約二十七パーセントに及ぶことになるから（論考Ⅱ）、この末尾は、すべて「今昔」といふ文頭形式を省いた説話本体を承接してゐると見るべきである。つまり付帯的事項も説話内容たる素材

に含まれるものと見ねばならない。説話の説話たる所以もここにあるのであって、構文の諸相に応じて、「トナム話リ伝ヘタル」の承接する部分を異にするやうに解することは、何といっても無理である。

それ故に、前にも触れたやうに、「梅沢本説話集」（古本説話集）上の第一話

いまはむかし、大斎院と申は、村上の十の宮におはします。……あけくれ、よませ給けりと人申つたへたり。賀茂祭の日、一条のおほぢに……（大斎院のこと）

のごとき様式は、文頭・文末の呼応形式が接近して、その関係をまづ明らかにして、以下の文にも、それを及ぼしてゐるわけであって、それには、後続の文に例へば、

宇治殿の、兵衛右にて、御禊の御ぜむせさせたまひたりけるに、……おもひかけぬ事にて、さる御心まうけもなかりければ、……たてまつりたりける御こうちぎをぞ、かづけたてまつらせ給ける……。

のごとく、使用される助動詞ケリが、そのやうな時制を補填しつつ叙述されてゐるものと解する。

さて、そのやうな、文末形式が次第に文頭形式に接近した極端な例として、「御伽草子」の中の「文正さうし」の書き出しを引用してみよう。

それ、昔より今に至るまで、めでたきことを聞き伝ふるに、賤しきものの殊の外になりいでて始めより後までも、ものうきことなくめでたきは、常の国に塩焼の文正と申すものにてぞ侍りける。……

いふまでもなく、「今昔」に相当するものが「昔より今に至るまで」とあり、それに近接して「聞き伝ふる」があらはれるのであって、これこそ文頭における主体的時制の表現でなくてはならない。

因みに、「御伽草子」にあっては、「いまはむかし」の文頭形式のものはなく、ほとんどが素材的な「昔」をもって始まり、その他では、「近き程のこととて」（音なし草子）、「中つ頃のことなるに」（ふくろふ）、源氏物語の冒頭を思はせる「いづれの御門のおほん時にや」（伊香物語）などがあることをもってすれば、その文章構造は、概ね本体そ

のもの（B型）であることは、もはやいふまでもない。

「いまはむかし」に対する「語りつたへたるとや」のごとき呼応関係を、私は嘗て、説話文の額縁と称したことがあった（論考Ⅲ）。その額縁は、修飾と被修飾の強い楔をもって、補強されてゐればこそ、比較的均等な説話本体の文章形態、―たとへば助動詞ケリを主体とするといふがごとき――をとり得たものであったと考へてよいのであらう。

さて「今は昔……となむ語り伝へたる」を「文正さうし」冒頭のやうに「昔より今に至るまで聞き伝ふるに」の意に解する以上、その内容たる説話本体（素材）には、本来的に「昔」といふ語が不必要になる。何となれば、「昔から今まで語り伝へ、聞き伝へ」た説話内容には、おのづから昔に存した意が派生するからであるし、実際は、通時的現在の中で語られる説話内容は、いはゆるケリといふ助動詞が支配する極めて自由な時制の中におかれ得るからである。自由な時制とは、過去にも置き得るし、現在にも置き得るといふやうな融通無礙なる超時間性をいふのである。既述の「去勢された昔」とは、「現在において語る昔」のことである。古くから「昔を今になす」といはれてゐるのはこのことであって（論考Ⅰ・Ⅱ）、昔は過去の意味がなくなった形骸的なものとなり、そこに通時的現在の真義が存すると見られる。

そのやうな傾向は、説話文の本体のみの形（B型）にあってもしばしばあらはれる。例へば「三宝絵詞」の中巻は、説話的要素の極めて顕著にあらはれてゐる点で特色があるが、

むかし、上宮太子とまうすひじりいます。（東大寺切関戸本八オ2）

昔、山城国に一人ノ沙弥アリ。……（観智院本九）

昔、大安寺ニ栄好トイフ僧アリ。……（観智院本十八）

のごとき、昔といふ副詞を置きながら現在形で終止するのも、その「昔」の去勢された形として看取され得るものであり、「三宝絵詞」の上巻等は、かかる場合、総べて過去の助動詞キを用ゐてゐるのは、漢文訓読的要素の濃淡にも

関係するもののやうである。

それ故「昔、男ありけり」のごとき「伊勢物語」冒頭の「昔」にも、多分にみぎに準じて考へてよい性格があると思はれる。助動詞ケリがことさらに現在を強調した回想であるならば、この「昔」も単純な過去の時制を示すものではなく、ケリ同様に、言語主体としての話者の位置に下して語る「昔」であると考へられるからである。それ故、かかる「昔」の用法はたとへ、説話の外郭乃至額縁がなくとも、説話本体においてすでに去勢の傾向にあったといっても差し支へない。

すでに指摘したことであるが（論考Ⅲ）、「今は昔」と「昔」とが、同一説話の異本において、校異としてあらはれる場合については、二つの場合を考へてよいと思ふ。その一つは、右のやうに去勢された「昔」が「今は昔」にとって代ったと見ることであり、その二は後世的な意味混同による置き換へである。しかし後者（その二）の場合が殆どであらうとはその時に述べた通りである。

ともかく「いまはむかし」を「今では昔」乃至「それは昔」の意にとってゐては、説話文における通時的現在の呼応関係が全く破られて、当初から説話としての機能を喪失してゐること論を俟たぬものである。

## 四

時制の副詞「今」については、これを指示代名詞に置き換へて訳すことがある。それは、一往正しい訳出法であると思ふが、もし、在来のごとく「それはむかしのことだが」といふやうな遠称または中称の指示代名詞を「今」にあてがふと誤りになる。それは極めて平易な事実から明らかである。例へば、

これは昨年のことだが、石油危機が起こって、困った。

これは明日のことだが、今いっておく。

といふやうな、過去乃至未来のことに関して、近称で指示することは、極めて自然な表現である。然し、文頭の「これ」を遠中称の「それ」で置き換へると、言語主体の現在における話題といふ意味が薄れて、大層そらぞらしく聞こえることも自明のことで、前述の「そのかみ」がその適例であった。

説話においても同様であって、話題として提示する場合には近称の「これ」を用ゐるのが常である。例へば「宇治拾遺物語」には、既に観察したやうに「今は昔」、「昔」、「これも今は昔」、「これも昔」のやうないくつかの文頭提示形式があるが、それらを指示するものは「これも」といふ近称の代名詞である。例へば「これも昔」は、その中で数少ない用例ではあるが、「鬼に瘻とらるる事」（一ノ三）、「五色の鹿の事」（七ノ一）の文頭はまさにそれであり、また「以長物忌事」（五ノ三）は「これも今は昔」とある諸本（圖書寮本・蓬左文庫本・九大本・桃園文庫本）を除いて「これも昔」である。

これらの用例について「これも」といふ指示は「昔」以下の説話本体を指したもので、「今」の関与する所ではないと考へる向きもあらうが、説話本体を「これ」と近称で指示することは、本来過去である「昔」の支配する説話本体を、言語主体としての自己の現在地に「これ」と近称で指示したことであるから、いはゆる「昔を今になした」ことと同義になる。しかして、「これも」は、「これは」と改めてもよいわけで、「今は昔」に対して「これは昔」と置いても何等意味の変るものではない。そして「これは昔」が判断文であるやうに「今は昔」も判断文としての性格を持った一種の熟語であることは、ここで明白になるのである。

次に問題になるのは、「これも今は昔」と「これも昔」とでは、意味上に違ひがありはせぬかといふことである。つまり「今は昔」が「これは昔」になるならば、「これも今は昔」は「これもこれは昔」となって、近称の指示が重複するのではないかといふ懸念である。しかし「宇治拾遺物語」では、「昔」と「今は昔」との区別が、「今昔物語集」の場合などと比較して、ずっと曖昧になってゐて、殆ど混用状態であること、つまり、それらの熟語が形式化し

て来てゐることで、まづ大目に見て差支へないものと思ふ。

それよりも大切なことは、説話本体が文末においても近称で指示され、その他の遠中称ではあらはれないことである。例へば「宇治拾遺物語」では

今は昔、……これは田村水尾などの御時になん在りけるにや。（十ノ七豊前王の事）

と末尾の形式に属する部分において、説話本体を「これ」と指示してゐるのであるが、同様のことは「今昔物語集」の場合、例へば

カクナム語リ伝ヘタルトヤ（五ノ二五）
此ナム語リ伝ヘタルトヤ（六ノ一）
此ク語リ伝ヘタルトヤ（一四ノ四）
如此ナム語リ伝ヘタルトヤ（三ノ二五）
如此ク語リ伝ヘタルトヤ（一四ノ二）

のごとき近称の副詞「かく」を用ゐることにおいて「語り伝へ」の内容を指示することに一致する。

以上のごとく、極めて一般的な事象について見ても、元来、説話の本体は、近称で示すことが普通であって、それはとりもなほさず、現在といふ時点において、昔に生起した事象、つまり説話本体を「これ」と指定したことになる。因みに「これは……である」といふ指定乃至判断文形は、近称の事物についての判断であると同時に、一方では、現在においてといふ時制が常にこれを支配してゐるものである。つまり時間の現在と、空間の近称とが同居した表現である。昔を今になして「これ」と指示したものが「今は昔」の概念であって、「宇治拾遺物語」の「これも今は昔・これも昔」は、多くの説話群の中における説話措定法であると同時に「これは昔」といふ説話の指示が存在することを十分に裏付けるものである。以上で「いまはむかし」を指示代名詞の「これ」に置きかへて訳出することの

正しく、またそのやうな把握法の古いものであることを説き、その際「いまはむかし」が判断文の形式による一種の熟語としての性格を持ったものであることを一往明かにした。

さて、「今は昔」の「今」字の訓は、既説の通り（論考Ⅰ・Ⅱ）、指示代名詞としては、コレであって、「今年・今来」の熟字が「コトシ・コノカタ」と訓めることをもってしても自明のことである。観智院本「類聚名義抄」にも「今　亠金　コム　イマ　コレ……」（僧中一）とあり、訓読資料における用例に鑑みても、その事は明らかである。

自歎今朝初得聞始知。（白氏文集第三天永点　五絃彈）

京畿盡今秋放税。（同第四　杜陵叟）

今夏五月因熱追涼遂動旧疾（興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝巻九承徳朱点）

等は、皆「今」字をコノに訓んでゐるが、特に最後の例は築島裕氏の労作を拝借した。それは、内容によるものであって、慈恩伝巻九の冒頭によれば、「今夏」とは、すでに過去となった顕慶元年（六五六）に碑文建立のことがあって、同年の夏の意味にあたる「今夏」なのである。つまり、過去の事象を指示する場合、「今」字を用ゐて「この年の夏」といふやうに述べてゐるのがこの訓読文における用例である。換言すれば、過去の年は、近称で「これ・この」と指示することが出来るのであって、これが「宇治拾遺物語」や「今昔物語集」における説話本体を近称で指示するのと揆を一にしてゐるものと考へるべきである。

本来「過去」乃至「昔」にあったことを「この・これ」と指示することは、矛盾のやうではあるが、既述の通り「昔から今に至るまで」といふ「語り伝へてある」に応ずる時制、つまり通時的現在によって「昔を今になす」ことと同義に見れば、決して不自然ではない。つまり「いまはむかし（今昔）」とは、「これは昔」乃至、「これは昔のことだ」といふ判断文の上に把へるべき熟語であって、それは、「昔より今に至るまで語り伝へてある」乃至「昔を今に語り伝へてある」ことを前提とする以上、右のやうな通時的現在の訳文の上に敷衍することも可能であるわけである。

## 五

以上のやうに、説話構文を把握し、また説話の時制を考へた場合、従来有力に説かれてゐる論考の骨子[注]をこれに照応させても、何等矛盾するものではない。

例へば、助動詞ケリについて、夙に細江逸記が説いた伝承回想の意味づけは、それが、英文典における Expanded Forms の概念や、トルコ語文典における Maziyi Naqli の観点に立つものであると説明されるが、確かにケリの一面を説いたものとして、妥当性を持ったものと見なされてゐる。それは助動詞キと共に、山田孝雄のいはゆる回想といふ動作の上に意味を措定したものであったが、回想とは、どこまでも言語主体の動作乃至精神作用としての謂ひであって、それは説話文の時制がケリ体をとるといふことで簡単に説明がつく。つまり文頭「今は昔」と文末「語り伝へたる」との呼応関係の中におかれて、両者の取りもつ助動詞ケリの意味としては、「昔から今まで伝へてある話」の心的確認のことになって、伝承回想の意味が極めて合理的に把握されることになる。筆者は、曽て助動詞ケリの意味を言語主体の他者を迎へとる姿勢とし（論考Ⅰ）、助動詞キとの対応において、次のやうに説明したことがある。

要するに、「き」は、対立的回想、ないし共時的回想、「けり」は迎合的回想、ないし通時的回想であって、いわゆ「言語主体の位置（現在点）に事象を迎え取っている」姿勢を示すものである。その迎え取り方にも種々あって、例えば継続体という具体的直接的な迎え取り、伝承という間接的な迎え取り、さらに現況に力点をおいた心理的な迎え取りとしての咏歎発見等を挙げることができよう。いずれにせよ、昔は常に今に対立するが、今は昔を迎え入れる（昔を今になす）ことができるという相互関係のもとに「き」と「けり」の性格が与えられているものと考える。（助動詞「き」と「けり」の論への回想（月刊文法四五・六月号九六ページ）―論考Ⅶ―）

即ち、これは、自己流の Expanded forms の説明に他ならない。前掲の「今はそのかみのことに侍るべし」（近代秀歌冒頭）の一文が、徹頭徹尾キ体であったことは、対立的な遠中称の昔（そのかみ）の時制の然らしめたものとも考へられる。

ただ細江逸記は、「竹取物語」の一部分の地の文と対話文とを材料にして、また「伊勢物語」の文例などを援用して、

私見によれば草紙地（記録的）に「けり」のあるのは、それが作者の言葉であって、「伝承」であるか、然もなくば自己の作意より出づる事柄を「伝承」として敍述するからで、何れも非経験に属し、又対話に「き」とあるのは、事述する事柄がその言者の「経験」であるか、然もなくば「経験」として陳述するからであって…（「動詞時制の研究」一三九ページ）

と述べ、登場人物の言動について、具体的にその経験・非経験の立場から説明するところがあったが、それよりも説話構文の様相に大局的な目を向け、特に「語り伝へたる」の文末形式との関はりを説けば、伝承回想の意味が更に説得力豊かなものとなり得たのではないかと思ふ。

次は民俗的な「昔がたり」の冒頭についてである。柳田国男の蒐集した数々の語り出しの形式について見ると、「とんと昔」、「ざっと昔」、「うんと昔」、「ずっと昔」等々雑多なものがあるが、中に岩手県西磐井郡の「こは昔あったとさ」、青森県津軽地方に「むがし、こァあったど」といふのが報告されてゐる。これ等は、「これは昔」の適応性を如実に語ってゐるものであらう。既に「宇治拾遺物語」で見た「これも今は昔」、「これも昔」とも相応ずる口碑に残った「今は昔」であるわけである。さういへば、岡山市近郊として報告されてゐる「これも、これも一昔」、愛媛県上浮穴郡の「これも十年一昔」に至るまで、説話を近称の「これ」で語ることの極めて自然であることを裏付けてゐるものである。柳田国男は、このことについて次のやうに説明してゐる。

古くは昔話の一つ毎にコハといふ語を添へてゐたのが、偶然に消え残ったものとも考へられる。とにかく始めに

は、伊勢や今昔のやうに「昔」とだけで済んでゐたものが、やがて「昔々」となり、「とんと昔」となり、同時に是非とも「あっとさ」と下に添へねばすまぬやうになったのは、全国一般の趨勢らしいのである。（全集六巻三七三ページ）

ここでは、「伊勢物語」や「今昔物語」のやうに「昔」とだけで済んだと述べてあるが、実は「今昔物語集」の場合の「今昔」（今は昔）こそは、「こは昔」の原形であったわけである。「今では昔」とか「それは昔」はこのやうな民俗的な口碑には上って来ないやうであるから、説話の本体を指示代名詞「これ・この」の系列において解することは、もっとも実証性を持った態度であって、しかもそれによって通時的現在の時制が確立することになると思ふ。

**注** 細江逸記「動詞時制の研究」（昭和七年二月）
柳田国男「昔話覚書」（昭和十八年四月）

## むすび

当初に述べたやうに、本稿の結論は、既説の「説話文体の効用」（文学研究六十六輯―論考Ⅴ―）をもって之にあてるのが適当であると思ふ。特に、その**四**、**五**、**六**は端的に結論性を強調したものである。

ともあれ、「今は昔」とは、「これは昔のことで」といふ意味である。即ち、「今はなすのは、昔のことで」の意となり、更に敷衍すれば、「昔から今に」あるいは「昔を今に」ともなる。従って、構文論的な解釈を施せば、「これは昔のことで、（説話本体）と語り伝へてゐる。」、「昔から今まで（昔を今に）、語り伝へてある話に（説話本体）とか聞き及んでゐる。」となる。

このやうな構文原理をもとに、「源氏物語」桐壷の巻の構文を論じたものが「説話文体の効用」である。桐壷の巻の文章は、その末尾が、

光君といふ名は、高麗人のめで聞えて、付け奉りけるとぞいひ伝へたるとなむ。

とあること周知の通りであるが、これは、

一、文章の最後に「とぞいひ伝へたるとなむ。」があることにおいて、説話文の末尾と全く同形である。「源氏物語」の中にも「いひ伝へ、語り伝へ」の語は随所にあるが、このやうな、文章末尾（巻末）に、「竹取物語」と同形で使用された例は他にない。

二、この条は、他本との校合においても殆ど異同はなく、ただ「校異源氏物語」によれば陽明家本のみ「光君とは、……付け奉りたる名なりとぞ。」となってゐて、「いひ伝へたるとなむ」が省略されてゐる。しかし、これは説話文末の変化形としては、極めて典型的なものである。

三、以上のやうな構文の形態的特色に対して、その内容的特色としては「光源氏」の命名の由来について述べてあるが、説話の文末に命名の由来が述べられることは、これまた極めて典型的といはねばならぬ。

等の理由により、その文章構造は、まさに説話文の「文頭省略型（BC型）であることも、前記拙論において述べる通りである。畢竟、文末の「とぞいひ伝へたるとなむ」は桐壷の巻の文頭「いづれの御時にか……」以下を受ける一文の末尾になる。

これを筆者は、藤壷女御に関する記事の文責を作者が意識して、巧みに回避した手法と見なすのである。「源氏物語」のみならず、わが古典文学において、文責回避の手段は、種々あるが、例へば、源氏夕顔の巻の末尾に「あまり物いひさがなき罪さりどころなく。」とある地の文などもその一つであらう。これなどは、文芸作品としての姿勢の中に封じ込めて考へられる文責回避法であるが、桐壷の巻の場合は、更にこと重大な、のっぴきならものを感じさせるものがある。それだけに原則によりながら、しかも巧妙な変用をもって、作者の切実な気持を込めたものであったに相違ない。

（一九七四・九・三〇）